

# 本興寺だより

令和六年

五月

第二五七号

「諸々の衆生未だ生・老・病・死・憂い悲しみ・苦惱を免れずして、三界の火宅に焼かる。何によつてか能く佛の智慧を解(さと)らん」

(法華経 譬喩品第三)

春の若葉が、鮮やかな緑色の葉をどんどん茂らせてきています。田植えも始まり、自然界の命の芽吹きを実感させられます。一方、元日の能登半島沖地震以来全国あちらこちらで群発地震が絶えず、不気味さと人間の力の非力さを感じます。早く収まって欲しいものです。

本来大自然が、あらゆる調和を保って営まれているように、人間も自然界との調和、人間関係の調和自身(の心)と身体(の調和)した生き方が一番大事だと教えています。

仏様は、私達は生老病死の苦惱をはじめ、多くの憂い、悲しみの中に浸っており、なかなか抜け出せないでいることを案じておられるのです。

命に生老病死があることは誰でも知っています。他人のことであれば。しかし人は、それを自分もそうであると納得し難い心もあるのです。

「生(生き方)」は、自分の価値観に応じて、幸不幸を決めてしまいがちです。

とは、何時訪れるかもしれない死というものを冷静に見つめ、後悔や憂いを残さない日頃の生き方が、心の安らぎと寿命の安泰につながるということです。

仏様は、ある例を通して私達の生きている現実を示しています。それは

「ある長者(大金持ち)の古びて朽ち果てた大きな家に忽然と火の手が上がりがつた。その家には五百人の人が住んでいた。住人は、火宅で遊び戯れていて、このままでは皆焼け死んでしまうため、長者は一計を案じ、まず三十人の子どもを方便を用いて自発的に外へ救出した。」とあります。後の人には懸命に外への避難を呼びかけた。

長者とはお釈迦様を指しています。

朽ち果てた家とは、清らかさが影を潜め、悪がはびこる世の中。その中で三毒(むさぼり、怒りや憎しみ、不平不満)の煩惱より起こった苦惱の火が燃えだし、家を焼き、何れ己自身も、生老病死の苦しみて燃え尽きてしまうことを私達は知らないということ。

苦しみの本質を知らず、楽しみのみを求めることは、ちようど家が焼けているのを知らずに遊んでいるようなものだと言われます。

そんなことをしていると、今に火宅が焼け落ちてしまうように、自分の一生が何の意義もなく終わってしまふことに気付かない。知らない。また聞いても驚かない。恐れてもいない。反省して心を立て直すこともしないと云われます。

「老い」ということ。若い時は老人を見ても、それは他人事です。髪が白くなる。薄くなる。剥けてくる。しみ、しわが増してくる。体力が衰えてくる、介護のお世話になる・・・など。何れは自分も老いてそのようなとは、思っています。

「病い」もそうです。健康が当たり前だと思つているので、病を患って初めて健康の有難さが身に染みると同時に、想定外の罹患に憂います。

「死」に出会うのは何時も他人の死です。人は自分の死は考えません。死の直前まで生きていますから。生前に死を考えることは縁起でもないとして、自分の死を絶えず先送りして、真剣に向き合わないと云われます。



人は、何れにしても自分の老病死は考えないのです。あるのは、思い通りにしようとする「生」のみなのです。その前提(想定)が崩れた時、苦悩に苛まれるのです。

日蓮聖人は、「人の寿命は無常なり・・・賢きも愚きも、老いたるも若きも、定め無き習い、さればまず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」と云われています。

この世の生命は、誕生があれば何時かは必ず死を迎えます。その時期は凡人にはわかりません。自身の臨終(死)を想定した時、誰に看取られて終えるのか? それでは家族関係や人間関係はどうあるべきだったのか。「悔いの残ることが沢山ある」時は、それでは常日頃どうすべきであったのか。「臨終のことを習う」

先の火宅の住人の内、多くは長者(仏様)の忠告を聞かず火宅の中で心まで燃え尽きたのです。

人生は苦惱が多くても、決して厭世(えんせい)的な生き方をしてはいけないのです。厭世的とは、人生や世の中を悲観して、生きることが嫌になることです。法華経には、「己の命を力強く輝かせて生きるための仏様の智慧が説かれています」。

知識は知ることによって得ることが出来ますが、智慧は信仰の体験や経験によって得られるのです。

仏様は、私達が仏の智慧を学び、自分の命の尊さに気付き、悔いのない明るい人生を歩むように願って教えを説かれておられるのです。



仏の子とは、仏の教えを聞く耳をもって聞き、信じて行う人であつて、誰でも無条件に、仏の子であり救われるわけではないということなのです。

尊い仏の種を持っていても、そのままでは宝の持ち腐れです。それを心田に撒き、発芽させて育てることで初めて自己の仏性の花が開花するのだと示されています。

物に恵まれていても、大火に焼かれる人生を歩むか?あるいはこじんまりしていても安穩な人生を歩むか?は、心の軸足の向きが決めるのです。

一度きりの人生を空費にして、己の進む道を改めることなく、幸せから遠ざかる生き方をしてはならないと云われます。